電車の中で

筑紫野南中学校3年 岩生 茉佑

「あの、こじ、えいぞ。」

そんな素敵な言葉を私が聞いたのは、夏休み中のある日のことでした。盲導犬を連れた女性に、男性が席を譲っていました。

私は毎日、電車で塾に通っています。夏休みとはいえっても会社に行く人、学校に勉強しに行く高校生、私と同じように塾に行く人など、たくさんの方が乗車し、いつも電車内は混み合っています。そんな中、私が乗車してから三つ目の駅に止まったとき、盲導犬を連れた女性と杖をついた男性、介護者と思われる女性が乗車してきました。入り口付近に立っていた私は、盲導犬が電車内に入ってきたとき、どうすればいいのか分からず、周りの人と一緒に電車の奥へ進みました。入り口付近を見ると、盲導犬を連れた女性が見つかる場所がなく、不安そうな顔をしてギュッと盲導犬のリードをつかんでいました。もう一人の杖をついた男性もオロオロしながら、つかまれる場所を探しているようでした。私は何か協力したいと思いましたが、

立っていたので席を譲るといってもできず、かといって、「この人に席を譲ってください。」と見知らぬ大人に声を掛ける勇氣もありませんでした。周りの人たちも、どうしたらいいのか分からないという顔をして心配そうに見つめていました。介護者と思われる女性がなんとかスペースを確保し、盲導犬を連れた女性を手すりにつかまらせて、杖を持った男性を壁ぎわに連れて行ってあげると、周りの人たちは少し安心したような雰囲気になりました。

しかし、思わぬことが起こりました。その盲導犬が床に寝転がったのです。後から調べてみると、盲導犬は電車内では飼い主の足元や座席の下に寝そべり、おとなしく待つのも仕事なんだそうです。その盲導犬はきちんと飼い主の足元に寝そべったのですが、足やしっぽが床にあったある男性のカバンにぶつかってしまい、その男性はカバンを大げさにどかして小さく舌打ちまでしていました。車内が揺れるたびに迷惑そうにその男性は犬をチラチラ見ている、私はとても悲しい気持ちになってきました。さらには、その男性の周りの人たちも嫌な顔をするようになり、いたたまれなくなったのか介護をしていた女性が、

「すみません。」

と悲しそうに目を伏せながら謝っていました。そして、盲導犬を連れた女性と杖を持った男性の手を取って、

隣の車両へ移動しようとしていました。女性たちが私の方へ近づいてきたので、私は心の中ですよと「誰か席を譲ってください。」と思っていました。でもやっぱり声は出せず、心の中で思っただけでした。そんなとき、私の目の前に座っていた男性が、

「あの、いい、ええや。」

とはっきりと言ったのです。恐らく皆が言おうと思っただけや、口でできなかった言葉を、その男性は口にしたのです。その三人は本当に嬉しそうな顔をして、何度も

「ありがとうございます。」

と繰り返していました。男性は盲導犬を連れた女性が座るのを見届けると、静かに別の車両へ去っていきました。女性は盲導犬を足元に寝転ばせると、ホッとしたようにリードを持つ手を緩めていました。盲導犬も心なしか安心しているように見えました。

「いい、ええや座ってください。」

今度は隣の女の子たちが杖をついた男性と、介護をしている女性に席を勧めていました。介護をしている女性はいさし恥ずかそうでしたが、はにかみながら、

「私もいいの、ありがとうね。」

と席に座って嬉しそうでした。さっきまでのいたたまれない空気はなくなり、なんだかとても温かい気持ちになりました。一人の男性の勇気ある行動で、車内が優しい雰囲気になり、困っていた人は笑顔になりました。「私もあんな大人になりたい。」と、強く思いました。

電車内にはたくさんの方がいます。困っている人に気づかないときもあるかもしれませんが、また、気づいても声を掛けずらいと思う人が多いのではないのでしょうか。私もそうでした。しかし、勇気を出して言ってみれば、素直に喜んでくれる人もたくさんいます。もし受け入れられなければ、静かに席を立ち去ればいいのです。そうすればその空席は、席を必要とする人が必ず座ってくれます。私はあの男性のおかげで、勇気を出して言うことができました。あの車両の雰囲気を覚えてくれて、私が勇気を出すきっかけとなってくれた男性に本当に感謝しています。

皆さんも、すてきな言葉で困っている人を助けてみませんか。